

未来をつくる高齢者

助け合い世代超えて

ドイツの場合



「老人こそ未来」
こんな願名の写真集がある。表紙には、高齢者の手の上に赤ん坊の手が重なる写真。ページをめくると、子どもと戯れる年配の女性、若者に囲まれ真剣に語る白髪の女性……。

の経済政策研究所で人口学政策を担当した。

その中に、ひときわ目をひく大柄の男性がいた。小さな男の子と一緒に満面の笑み。ドイツ北西部にあるアルンスベルク市のハンス・ヨゼフ・フォーゲル市長(53)だ。「老人こそ未来」とは、市長が進める高齢者向けプロジェクトの名で、写真集はそのPR用だった。

市長に会いに足を運んだ。現れた市長は、熱く語り続けた。「お年寄りとはさびついた鉄ではなく、経験や知識を持つ宝」「彼らの潜在能力を無視して高齢社会は乗り切れない。「老人こそ未来」なのです」。自信に満ち、息つく間もなく語る。包み込むようなまなざしの奥に、誠実さと強い意志がのぞく。

プロジェクトの市の負担は約36万8千円(約4400万円)で年間予算の0.2%ほどだ。企業系



高齢者とピンゴゲームを楽しむグロープさん(左) =ドイツ・アルンスベルク市

の財団からの助成金もある。「知識と工夫さえあれば、わずかなお金で活力ある高齢社会が築ける」と市長。

介護施設で手伝いも

「ピンゴ」。認知症の人ら80人が暮らす介護施設を訪ねると、明るい声が響いた。ボランティアのエルゼ・グロープさん(70)はピンゴゲームの数字の読み上げ役。夫が他界した3年前、市の募集に応じた。「何か社会の役に立つことがしたかった」。イングリット・パンカンフさん(64)も3年前に夫をみとり、一人暮らし。「お世話の相手と市場にも一緒に行く。私はおしゃべりが大好き。ぐちを

聞いてもらっているよ」
2人に促されてゲームに参加した認知症の女性2人の表情は穏やかで、笑顔に満ちていた。
施設の近所で認知症の母親(81)と暮らす女性、ウーテ・セベリンさん(41)は月に2、3回、「小休止」を利用する。母の好きなピアノの演奏や散歩の同行を依頼する。母は笑顔が増えたという。去年、介護疲れで入院したセベリンさんは「母を預けて、私は演劇を

「人口約8200万人のドイツでは現在100万人余りが認知症と推測され、予防が大きな課題だ。アルンスベルク市も1000人程度。今後さらに増える」とみられている。」
熱弁をふるいながら市長は強調した。「ひととはみな年をとる。世代を超えて互いに助け合うという連帯の文化がドイツの社会保障の哲学。そしてそれが私の信念」

認知症対策 日本でも力

日本でも認知症対策の重要性は増している。今年4月の介護報酬改定で、「認知症ケアの充実」は従事者の処遇改善と並ぶ柱とされた。認知症ケアについて12種類の加算を創設。認知症グループホームを出て自宅に戻るときの相談援助や、徘徊といった周辺症状などが出た緊急時の受け入れなどに報酬を付けた。

適切な認知症ケアには、「認知症」という診断が欠かせない。厚労省は、認知症対策の全体像を示した08年の「緊急プロジェクト」で、早期診断を「出発点」と位置づけ、専門医の育成やかかりつけ医の研修に取り組む。診断の遅れで認知症が進み、生活に支障を来した後の介護サービスが中心になりがちなどの指摘を踏まえた。10年以内にアルツハイマー病の根本的治療薬の実用化を目指す。

一方で、国は認知症の正確な患者数を把握していない。介護保険の要介護認定を使って、02年に149万人という推計もあるが、医学的に診断されたものではないなど、厚労省も「正確に反映していない」と認める。今年度から2年かけて、初めて本格的な実態調査をまとめる予定にしている。

「連帯」のドイツ、「公」のスウェーデン

「社会保険料は高い。でも将来、何かあった時のための安心料。認知症の父は今、ちゃんと介護を受けているわ」。在宅介護の取材を受け入れてくれたザビーネ・ランドンゲンさん(44)は、せきこむ父(79)を気遣いながら答えてくれた。

ドイツでは、負担を受け入れ、地域や職域、教会など集合体でリスクに備える。支え合う「連帯」が基本だ。60歳の男性が日本の「派遣村」について語った。「考えられない。ドイツなら、そうなる前に周囲が放っておかない」

一方、「公」に強い信頼を寄せるのがスウェーデン。日曜の午前、ストックホルムの教会で会ったピンクのベレー帽が似合う女性

(85)。歩行器につかまり、礼拝に来た。「お元気ですね」と声をかけると、「当たり前でしょ？ 生きることが大好きなのよ」。一人暮らしで、娘が時々そうじに来てくれる。自分で何もできなくなっても公的支援があり、安心だと話した。

マリア・ラーション健康・高齢者担当は3月末、川崎市の老人施設を視察した。「最終的に大きな違いをもたらすのは哲学。介護を受ける人の尊厳を保つこと。人として歩んできた道がある。それを尊重しないと」

連帯と「公の責任」。原則は異なるが両国で共通するのは、将来のリスクを社会が支えてくれるという安心感だった。

(森本美紀)

料理メモ

ナスとひき肉のいため煮



見たり旅行に出かけたり。まさに「小休止」。支援がなかったら私はつぶれていた」と話す。